


 経済学
 的思考
 のススメ
 第4回

何気ない人の行動にもすべて理由があり、分析することが経済学では可能です。しかし分析そのものが目的ではなく、身近な問題をひとつずつ解決していくうえで役立つ、きっかけとすることが大切です。最終回は、そんな誰でも身に付けることができる経済学的思考のススメがテーマです。

経済学的思考のススメ

経済学的思考とは

これまで3回にわたって夫婦や家族をテーマとしたお話をしてきました。どのような感想をお持ちになったでしょうか。夫婦や家族は愛情によって結ばれているのに、それをドライな損得勘定で説明することに納得できないとお感じになった方も多いことでしょう。

もちろんおっしゃるとおりで、私が自分の家族のことを考えるときも、常に「損得マシーン」のように利益とコストを天秤にかけて判断しているわけではありません。

ただ、実際に行動することと説明することは別だとする考え方もあります。ある高名な経済学者は「経済学者が考えているように人間は行動して

いるわけではない」との批判に対して、「リンゴは木から地面に落ちるときに『落ちたい』と思っただけで落ちるわけではない」と反論したそうです。つまり「本人」がどのような気持ちで行動しているかということと、その行動をどのように説明するかは別物という意味です。

この最終回では、経済学者が考える説明というのはどういうものなのか、例をあげてお話ししてみたいと思います。

なぜ若いカップルは手をつなぐのか

休日の渋谷を歩くと、手をつないで歩く男女（手をつなぎカップル）をよく見かけます。なぜ彼らは手をつないでいるのでしょうか。この問いに対して、ほとんどの人は、「お互いに好きだから手をつない

中島 隆信

なかじま たかのぶ

経済学者。慶應義塾大学商学部教授。専門は応用経済学。1960年生まれ。83年慶應義塾大学経済学部卒業、01年同大学博士号（商学）取得。01～07年7月、09年～慶應義塾大学商学部教授、07～09年3月内閣府大臣官房統計委員会担当室長。

寺、障害者、「オバサン」、刑務所といった、経済学とは一見縁遠いと思われる対象を、経済学の視点から一般向けに論じた著書多数。また、「大相撲の経済学」を著すなど大相撲にも造詣が深く、大相撲野球賭博問題を契機として設置された日本相撲協会「ガバナンスの整備に関する独立委員会」の委員に就任し、副座長として年寄名跡の売買禁止などを内容とする相撲協会改革案についての意見書を取りまとめている。

でいるに決まっているじゃないか」と答えます。しかし、経済学者の答えはそれとは違います。

11月22日は「いい夫婦」の日だといわれています。昨年この日、あるショッピングモールが「手つなぎ夫婦」にクーポン券をプレゼントするという企画をしました。その企画を聞いて手をつなぎながら窓口を訪れた夫婦は、とても仲睦まじく見えました。報道機関の取材に対して、「手をつないだのは何年ぶりかなあ」と話していました。実際、街でよく観察してみますと、手をつないでいるのはほとんど年齢が若くまだ結婚していないカップルのようです。つまり、「手をつないでいる」と「いいカップル」であることには必ずしも相関がないことが分かります。

そうだとするとなぜ手をつなぐのでしょうか。もつと正確に言えば、なぜ大勢の人が見ているところで手をつなぐ必要があるのでしょうか。わざわざほかの通行人の邪魔になるような混雑したところではなくてもよさそうにみえます。

この問題に対する経済学者の答えは、「周囲に対して自分たちが『いいカップル』であることを見せるため」というものです。他人に見せることが重要なのです。他人に見せることによって自分たちの愛を確認し合っているといってもいいでしょう。このように、自分たちの意志をより確実なものにする行為を、経済学では「コミットメント」と呼びます。

たとえば、ある愛煙家が禁煙しようと考えたとき、一人静かに決意するよりも、仲間や上司のいる

前で、あるいは自分のブログなどで高らかに宣言する方が効果的といえます。なぜなら、みんなの前で宣言してしまった以上、再びタバコを手取るには、みんなに説明しなければならぬでしょう。しかも、説明すると、三日坊主と笑われてしまうかもしれないのです。このことが大きな心の負担になり、後に引けなくなるのです。コミットメントは禁煙をやめてしまうコストを高くするといえるのです。

こう考えると、手をつなぐカップルのほとんどが結婚前であることも説明がつかず。なぜなら、結婚式や披露宴というものが最大のコミットメントだからです。多くの知人や親族が見守る中、神前で変わらぬ愛を誓うのです。その後の披露宴では、手に手を取ってウェディングケーキに入刀し、親戚のおじさん、おばさんが「愛の讃歌」を熱唱し、新婦の友人が涙ながらのスピーチをします。これほどの祝福を受けてしまったら、おいそれと離婚などできるわけがありません。ですから、結婚式というコミットメントの済んだ夫婦にとって公衆の前で手をつなぐ必要はありません。逆に言えば、恋愛中のカップルが手をつないでいるのはまだコミットメントが足りない状態、すなわち二人の関係が不完全であることを意味しているといえます。

この説明で納得していただけましたか。

食品偽装問題を説明する

昨秋、大阪の某ホテルに端を発した「食品偽装問題」ですが、その後、さまざまなホテルやデパー

トでも同様の問題が発覚し、大きく報道されたのでご記憶の方も多いと思います。

この問題に対してコメントを求められた客の多くは、「食材を誤魔化しているなんて許せない」「信用して買ったのにだまされた気分だ」などと答えています。また、この問題の原因については、業者サイドは「食材が途中で変わったことを表示し忘れた」などと過失であることを強調する一方、客サイドは「金儲けのために安い食材で代用したんだろう」と思っているように見受けられます。さて、経済学者はどう考えるのでしょうか。

確かに、業者にも言い分はあるでしょうし、客の解釈ももつとも思えます。でも問題の背景にはもつと深いわけがあるのでないでしょうか。このニュースを聞いたとき、私はひとつの疑問を持ちました。それは、「信用できない」「だまされた」とカメラの前で不満げに話す消費者は、同時に、安価な食材と高価な食材の識別ができないことを告白しているのではないかとということです。

実際、「バナメイエビ」と「芝エビ」は現物を見れば別ですが、中華のチリソース炒めにしてしまうとプロでもほとんど見分けがつかないそうです。テレビでは、芸能人が本物とニセ物の味の見分けがつくかを試される番組を目にしますが、グルメを自称する人でもなかなか正答するのが難しいようです。今回問題となったレストランの中には格付け本でも高い評価を得ていた店もあったようですので、一般の消費者が分からなくても当然といえる

でしょう。

そもそも料理というものは、素材を上手に加工する技でもあります。素材の新鮮さをそのまま生かす料理もありますが、すべてのレストランが産地の近くにあるわけではありません。むしろ素材の新鮮さに多少見劣りがしても、それをソースや火加減で補い、美味しく仕上げてこそプロの技なのではないでしょうか。

日本の高級レストランでは、〇〇産本マグロとか〇〇牛などと素材の産地を記載することが当然のようですが、海外の高級レストランでメニューに肉や魚などの産地が併記されていたことは私の記憶ではほとんどありません。産地などよりも料理そのものの味やレストランの雰囲気、サービスの中身で勝負といったところでしょう。

それなのになぜ日本では産地を明記するのでしょうか。その理由は消費者が産地にこだわるからです。何年か前に中国産のウナギから残留薬物が検出されたとき、日本の消費者はスーパーでウナギを買うとき産地かどうかを確かめるようになりました。一見するとこれは賢い行動のように見えます。でもよく考えてみてください。もし消費者が産地にこだわり、外国産というラベルが貼ってあるだけで買わないという行動をとれば、品質のいい外国産うなぎを消費者に届けようと努力している良心的な業者は日本から撤退することになるでしょう。

その一方で、何としても外国産のウナギを日本で

売ってしまいたいと考える業者は、日本産と偽って市場に出すようになるでしょう。つまり、消費者の産地にこだわる行動は、良心的な業者を締め出し、いかがわしい業者を招き寄せる結果にもなり得るのです。

このように考えれば、今回の食品偽装問題の根本的な原因が分かります。高級ホテルで出されるステーキは〇〇牛、チリソース炒めは芝エビと書かれていなければ納得しない、逆に、〇〇牛と銘打ってあればそれだけで安心、などといった行動を客がとれば、業者に偽装のインセンティブを与えることになります。なぜなら、業者は消費者の反応を前提として行動するからです。本来のグルメとは、味の見分けがつく本物の舌を持った人のことです。今回の偽装問題は、味の区別よりも産地やブランドにこだわりがちな日本の消費者の行動に原因があったともいえるのです。

思考停止にならないように

以上の2つの例から、世の中の現象を経済学的に説明することの意味がお分かりいただけでしょうか。なぜこんな理屈っぽく説明する必要があるのか、もっと単純に考えればいいじゃないかという声が聞こえてきそうです。

その答えとして、明治時代の思想家で慶應義塾の創始者でもある福沢諭吉の言葉を引用しておきたいと思えます。以下、『学問のすすめ』からの一節です。

西洋の諺(ことわざ)に愚民の上に苛(から)き政府ありとはこの事なり。こは政府の苛きにあらざ、愚民の自ら招く災なり。愚民の上に苛き政府あれば、良民の上には良き政府あるの理(ことわり)なり。故に今、我日本国においてもこの人民ありてこの政治あるなり。仮に人民の徳義今日よりも衰えてなお無学文盲に沈むことあらば、政府の法も今一段嚴重になるべく、もしまた人民学問に志して物事の理を知り文明の風に赴(おもむ)くことあらば、政府の法もなおまた寛(かん)仁(にん)大(たい)度(ど)の場合に及ぶべし。

ここに書かれているのは、国民が学問をせず愚かなままであると、政府は法律を厳しくして国民を管理するようになりますよ、でも国民がしっかりと学問に励んで賢くなれば政府は寛大になりますよ、ということですよ。自立するために学問をせよと福沢は言っているのです。

私は経済学的に考えることだけがすべて正しいとは思いません。テレビ番組で有名になったM・サnderl教授のように、より一段高い哲学の観点からいろいろな問題を考えることも重要だと思っています。大切なことは私たちが思考停止にならないことです。このシリーズをお読みになった方が、身近な問題についてもそれをスルーするのではなく、立ち止まって深く考えてみようと思っただけなのになつたとすれば、それに勝る喜びはありません。

連載エッセイ 経済学的思考のススメ

第4回

経済学的思考のススメ